



鈴木 厚人

一般社団法人東北経済連合会 参与

大学における教育とは

今から5年前、岩手県立大学への赴任が決まった時、“大学における教育とは”、“なぜ今、地方創生なのか”について自問自答しました。本紙面をお借りして、“大学における教育とは”の自答を述べさせていただきます。

“大学における教育”の原点は、高校生徒から大学生へ、つまり“生徒”から“学生”になったことを重視することと考えます。それは、受動的な“学び”から能動的な“学ぶ”への転換を促し、教(教え)から育(育てる)の教育に比重を移すことです。

そして、能動的に自ら“学ぶ”は、“なぜだろうか”、“どうして”と不思議に思うことが出発点で、朝永振一郎先生(ノーベル物理学賞受賞)の言葉の中の“科学”を“学ぶ”に置き換えると、“学ぶ”の姿勢が明確になります。それは、「なぜだろうかと不思議に思うこと、これが“学ぶ”の芽です。よく調べ・確かめ・考えること、これが“学ぶ”の茎です。そして最後に謎が解けること、これが“学ぶ”の花です」。

次に“学ぶ”対象は、今直面している課題に集中することです。本多光太郎先生(東北大学第六代総長)は「今が大切」、ニュートンは「今日なしうることに全力を注ぎなさい、そうすれば明日は一段の進歩を見るでしょう」という言葉を残しています。これらの姿勢を身に付けることが大学教育の基本と考えます。

昨年、国の中央教育審議会が「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」をまとめました。この中の「我が国の世界における位置付けと高等教育への期待」の章で、「成熟社会を迎える中で、直面する課題を解決することができるのは『知識』とそれを集約し、組み合わせて生み出す新たな価値となる『新しい知』である。その基盤となるのが教育であり、特に高等教育は我が国の社会や経済を支えることのみならず、世界が直面する課題の解決に貢献するという使命を持っている」と記されています。

しかし、この“知の集約”の教育姿勢は教育の一面だけを捉えているものです。かつ、Society5.0の社会では、大量データやIoTを駆使したAI(人間の指示の下で)が主役になるでしょう。大学における教育は、“知の集約”(1000→1)のみならず、人間が主役でAIでは不可能な“知の創造”(0→1)と、“知の展開”(1→1000)も重要な側面です。

最近、ある雑誌に外国人記者が、“A Leadership Love Note to Japan”と題して、“世界を引っ張るのは日本の若者たちだ:大きな可能性を秘めながら内向き志向に陥った日本。今こそ自信を取り戻す教育を”と提言していました。“教から育”主体へ、さらにパスカルの言う「人間は考える葦である:思考する存在としての人間の本质」が“大学の教育”の基本であることを再認識しています。

(岩手県立大学 学長・すずき あつと)